



白門板橋

2007. 3. 15 VOL.27

編集
発行

中央大学学員会 東京板橋区支部
〒175-0082 板橋区高島平2-23-3-101 TEL03-3550-3300



■新春の「あいさつ」 事業計画の遂行にご協力を！

支部長 小日向幸介

* * *

会員の皆様には、ご多用のところ、本日の「新春の集い」にかくも多数ご出席いただき、ありがとうございます。

当支部は、皆様の日頃のご支援のお陰をもちまして、ここいめでたく平成一九年を迎えることができました。今年も、役員一同、心を一つにして、事業計画の遂行に真摯に取り組んでまいりますので、引き続きご協力をお願い申し上げます。

さて、正月恒例の箱根駅伝では、往路の不振がたたって、総合八位に止まりましたが、シード権は確保した選手の健闘をたたえると共に、来年の上位入賞を期待したいと思います。

司法制度改革にもとづく昨秋の新司法試験合格者は、母校中大が東大を抜いて、日本一の荣誉に輝くことができました。関係者の努力と労苦に感謝すると同時に、今後もこの好成績を維持してほしいと念願しております。

すでにご承知のとおり、この春は地方議員の統一選挙が行なわれます。当支部からも、地方行政に情熱をもち、優れた能力を有する学員の立候補が予定されています。候補者に対しては、支部として極力応援してまいりたいと存じますが、見事当選の暁には、経済格差の是正を始めとして、安心安全な街づくり、福祉の向上に積極的に取り組み、板橋区の活性化に尽力していただきたいと思っております。本年が、当支部にとり、また会員の皆様にとりましても、輝かしい一年であることを祈念して、挨拶いたします。

（「新春の集い」支部長メッセージより）

支部ニュース

五十八名が新年を祝う

恒例の「新春の集い」が、一月二〇日(土)午後六時から、会員五十八名が参加して、区立文化会館大会議室で開催された。

風邪気味で体調不良の大野事務局長に代わって、徳永副幹事長が司会。小日向支部長の新年の挨拶のあと、全員で記念撮影。とても九十三歳とは思えない声量の、関常任幹事のご発声で乾杯。



懇親会に移って間もなく、カラオケ同好会・佐藤(義)会長のリードで、会員の持ち歌が次々と披露された。途中、新年会の掛け持ちの合間を縫って駆けつけた石塚顧問(区長)のご挨拶もあって、宴たけなわ。

校歌、応援歌、借別の歌の三点セットを、中三川常任幹事と荒井幹事の音頭取りで、全員輪になって斉唱。別れを惜しみながら、栗山相談役の三本締めで散会となった。(池田記)

新装「よし色」で忘年会

一二月九日(土)、恒例となった忘年会を、新装なった蓮根「よし色」で挙行、四十名が参加した。

今回の担当幹事から、ブロックごとの当番制が取り入れられ、まずはトップバッターとなった山田・中板橋ブロック長の開会の辞。近藤世話人の司会のもとに、小日向支部長、石塚顧問(区長)から挨拶をいただいたあと、店の改装にともなう苦労話を川口副支部長が披露。水野相談役の乾杯の音頭で開宴となった。

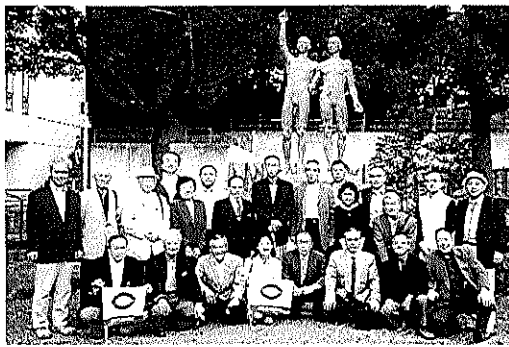
ライト・アップされた幻想的な

庭、木の香も新しい造作にびったりの、選びぬかれた卓、椅子、障子、引き戸などの調度類が、次々に供される佳肴の味を、一段と高めてくれた。

一年を締めくくるに相応しい会場の雰囲気と料理を満喫して、最後はやはり借別の歌で、お開きと相成った。(大野記)

ホームカミングデー

第十七回ホームカミングデーが、一〇月二二日(日)、中央大学多摩キャンパスで開催された。昨年に引き続き、当支部では貸切バスを仕立てて参加した。高島平駅前



▲「青年の像」を背に参加者の面々

十名、常盤台で五名、板橋区役所前で八名が乗り込み、総勢二十三名が、首都高・中央道利用で、かなり早めに会場へ到着した。

NHK葛西アウンサー(四九年法卒)が司会したクレセントホールでの開会式は、親子三代卒業者の表彰もあって、和やかに進行了した。

メインステージに移動してからは、応援部演技、作家・逢坂剛氏を招いてのトークショー、ハーモニカソサエティと武蔵国府太鼓の演奏などを楽しんだ。

広いキャンパス内のはずれに位置する第一体育館まで足を延ばして、練習中の相撲部部員を激励したり、茶室・虚白庵での呈茶の催しにも参加してみた。

福引のランキー賞を六人が獲得する幸運にも恵まれ、帰りの車内は大いに盛り上がった。母校の売店で買い求めた地酒と白門ワインは、あつという間になくなってしまい、バスも予定時刻より早く帰着した。

次回もまた多くの仲間と一緒に多摩キャンパスでの一日を楽しみたいものだ。(金子記)

母校のニューズ

新司法試験合格者、百三十一名

*
 昨年九月二日に発表になった、新司法試験制度の本学の合格者は百三十一名を数え、東大を抜いて日本一の榮譽に輝いた。これは実に二十四年ぶりの快挙で、新制度改革に積極的に関わってきた中大としては、ひと安心といったところ。なお、旧制度による合格者は四十三名で四位だった。

入学志願者が五千人増加

* *
 早・慶・明などの各大学が志願者を増加させるなか、昨年、中大は五千人を超える減少となり、世間の評価を下げていた。一転、今年は五千人増加して、六万六千人が受験し、面目を回復した。また関心の高い法学部法律学科の一般試験は、いつもながらの十倍と狭き門だった。

箱根駅伝シード権獲得

* * *
 正月恒例の箱根駅伝は、全日本



駅 大 学 復 往 間 根 箱

大学駅伝三位の余勢を駆つての上位入賞が期待されたが、相次ぐブレーキがたたつて往路は何と十四位に低迷。復路の最終十区でタスキを託された時点での順位は十位だったが、アンカー宮本(写真)が頑張り、何とか総合八位に入つて、十位までに与えられるシード権を守る事ができた。三区で九人抜き、快走をみせて区間賞を獲得した上野を始め、有望選手が揃つていただけに、来年こそ巻き返しを図つてほしいものだ！

公認会計士、百五十七名が合格

* * *
 平成一八年度公認会計士試験の

本学からの合格者は、百五十七名だった(試験制度が変更されたため、公認会計士補の合格者九十三名を含む)。短答式から受験した公認会計士補以外の合格者数は、六十四名ということになる。

東京地検特捜部長に八木氏

* *

警視庁の捜査一課長と並んで世人の耳目を集めるのが、東京地検特捜部長の人事。この程その要職に、本学出身の八木宏幸(やぎひろあき)氏が就任した。昭和五十四年法学部卒で、大阪府出身の五十三歳。大阪、東京両地検の特捜部に十三年半在籍し、早くから「特捜部長になる男」と言われていた期待の星である。東京地検総務部長からの異動となった。

愛知県知事に神田氏三選

*

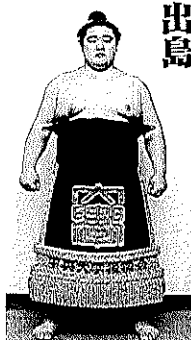
いまや白門出身ただひとりの県知事となつてしまつた神田真秋氏(五九年法卒)が、激戦を制して、愛知県知事に三選された。なお、同氏は弁護士で、元一宮市長。

(栗原記)

疑惑晴らす出島の金星

競争の激しい出版業界で、大相撲の八百長疑惑を報じた「週刊現代」(講談社)が話題になつたが、日本相撲協会は十七名の力士と連名で、四億八千万円の損害賠償と謝罪広告を求めて、東京地裁に提訴した。

それにつけても、一月場所です優勝した横綱・朝青龍に、唯一の黒星をつけた、白門出



身の出島関に、拍手を送りたい。
 さすがというか、本学で法律を学んだだけに、フェアな勝負を挑み、横綱を土俵の外に突き出した金星は、燦然と輝いていた。

(池田記)

告知板

■支部観桜会の日程

支部恒例の観桜会の日程が、次のとおり決定しましたので、お知らせします。

記

日時 四月一日(日)

集合 平和公園(筑波大跡地)

会場 割烹・黒船

会費 五、〇〇〇円

担当 前野町ブロック

(吉野、吉岡、笠原)

申込み 別紙で三月二七日まで

■支部定時総会の日程

* * *

第十八回定時総会の日程が、次



▲昨年の観桜会スナップ

のとおり決定しましたので、お知らせします。

日時 六月二二日(金)

午後六時から

会場 区立文化会館大会議室

■同好会だより

*

◎ゴルフ同好会

昨秋一〇月一七日、ノーザンカントリークラブ錦ヶ原ゴルフ場で行なわれた白門板橋ゴルフコンペの結果は、左記のとおりでした。

優勝 末田紀之

準優勝 吉野昭一

三位 栗原三郎

なお、今春の大会は三月二七日

(火)に開催される予定です。

* * *

◎パソコン同好会

この二月七日、一四日、二二日の各水曜日に、初心者講習会を集中的に開催。浮間舟渡駅近くの企業活性化センター(アイ・タワー)二階会議室に、毎回十五名ほどの受講者が参加した。

また、姉妹組織にホームページ研修会があり、支部運営で板橋白門会の公式ホームページを立ち上



カラオケ06'10-18
板橋白門会 於:グリーンホール

げるため、準備を進めている。

* * *

◎カラオケ同好会

平成一七年五月から、会場をグリーンホール地下一階のレストラン・サンイチに移して、年二回の集まりを続けている。昨年、会長が佐藤道則さんから佐藤義さんに代わった。

* * * * *

◎囲碁同好会

毎月第四土曜日に、十二名ほどの会員が参加して、西池会館で月例会を開催している。

■都区内支部連絡会

十周年記念イベント

中央大学学会の都区内支部連絡会が結成されて十年。

これを記念して、当支部の墨田区支部が、ビッグなイベントを開催した。

板橋区支部でも、チケット三十枚を購入したのを始め、会場整理に必要な要員を派遣するなど、協力を惜しまなかった。

一月二二日(水)、会場のすみだトリフォニーホールは満員の盛況だった。中央大学スウィング・クリスタル・オーケストラのスウィングジャズコンサートをメインに、ソプラノ歌手サイ・イエンゲン、ピアノニスト・小森瑞香、宝塚OG歌手・南原美紗保、指笛奏者・松谷茂といったゲストたちが熱演を繰り広げ、多くの聴衆が時のたつのも忘れて楽しんでいった。

(金子記)

■秋の旅行記

名城と溪谷美・会津の旅



*

一〇月二十九日(日)八時五〇分、会津芦ノ牧温泉・大川荘前をバスは出発。昭和四五年中大卒の渡辺社長が、奥さんと並んでいつまでも手を振り、我々を見送ってくれていた。

前夜も温かいもてなしを受け、同窓の絆を強く感じていた。仲居さんのサービスも申し分なく、郷土色豊かな料理の数々に、酒どころ会津の地酒もたつぷり。お陰で宴会は、大いに盛り上がり、引き続いでのカラオケへと、なだれ込んでいった。

ホテル到着後に入った、四季舞台たな田と呼ばれる大浴場や空中露天風呂も素敵だったが、館内のゆったりした空間や設備に、経営者の理念ともてなし心が、感じ取れた。

小原庄助さんゆかりの地ではあったが、朝寝・朝酒つきという訳にもいかず、朝湯だけはしつかり

堪能した。バイキング形式の朝食は、質、量ともに豪華で、楽しい一日の始まりを、我々に予感させてくれた。

* *

前日、二十七名が乗り込んだ貸切バスは、定刻八時一五分に板橋グリーンホール前を出発した。首都高・東北道・磐越道を通じて、猪苗代磐梯高原インターチェンジで降り、旅食房・三城で昼食。五



▲会津・鶴ヶ城を背に記念撮影

段重ねの猪苗代祝言そばに舌鼓をうったあと、隣接する野口英世記念館へ。母シカが博士にあてた、たどたどしい手紙などを見学してから、すぐ傍の会津民俗館へ。ここでは「会津ブランドものづくりフェア」が開催されていた。会津塗や地元産材を使った木工品の製作実演・展示・即売をメインに、みやげ物や地酒も売られていて、早くもそれらの品々をせっせと買い込む仲間もいた。

* * *

朝食をすませて先ず向かったのが、会津西街道・大内宿の近くにある「塔のへつり」。国の天然記念物に指定され、奇岩怪石が織り成す溪谷美は、神秘的な雰囲気がい、かつて訪れたことのある、三陸海岸の浄土ヶ浜を思い出させてくれた。数軒あった土産物店に付いたのが、林立するマムシ入りの一升瓶。強烈に人目をひいてはいたが、購入する観光客にはお目にかからなかった。

さて、いよいよお目当ての鶴ヶ城。天守閣見学組と公園散策組とに分かれて時を過す。散策組がびつくりさせられたのが、「荒城の月

碑」まえでのこと。ボランティアの城内ガイドのすすめもあって、老壮年混声合唱団が朗々とこの曲を唄っていると、二十代前半の女性から、初めて聞きましたがいい歌ですねと話しかけられた。褒められたのは嬉しかったが、彼女は学校で教わったことがないとのことと、日本の音楽教育はどうなっているのかと心配させられた。

鶴ヶ城会館での昼食は、地の利もあってか、団体客が次々と訪れ、慌ただしくすませた。すぐ近くの宮泉銘醸で酒蔵見学のあと、飯盛山へ。白虎隊記念館の早川理事長は中大OB、自ら先頭に立って、たつぷりと展示品の説明をしてくれた。山上の白虎隊士の墓にも詣で、幕末の戊辰戦争で、若き命をあたから散らした、彼らの無念さを偲んでから、帰途についた。

磐梯河東インターチェンジから磐越道経由で東北道へ。事故渋滞も重なって、それから時間がかったのをいいことに、車内はカラオケとアルコールで盛り上がりっぱなし。予定より二時間遅れの帰着にも、不満の声はあがらなかった。

(金子記)

■白門作家シリーズ

逢坂剛文学拾い読み

『道連れ彦輔』

著者／逢坂 剛

発行所／株式会社文芸春秋

■著者プロフィール

一九四三年、東京生まれ。

八〇年に、暗殺者グラナダに死

す。オール読物推理小説新人

賞を受賞。八七年『カデイスの赤

い星』で直木賞・日本推理作家賞

をダブル受賞。

一九六六年中大法学部卒。白門

出身作家の代表格。

* * *

「オール読物」の二〇〇四年二

月号に「仇討ち千駄ヶ谷富士」を

初出してから、二〇〇五年三月号

に「鞠婆」、同年六月号に「地獄街

道」、九月号に「大目小目」、二〇

〇六年一月号に「本懐を遂ぐや」、

同七月号に「無残やな隼人」を断

続的に執筆したものを、昨年一

月に一冊にまとめて、文芸春秋か

ら刊行された。

* * *

ご存じのように逢坂剛は、お茶

の水罫・刑事シリーズで名を挙げ

たミステリー作家であるが、本書

では珍しく時代小説を書き上げて

彼にとつては意欲的な作品と言え

るかもしれない。

時代小説の衣をまとっているが、

本質はミステリー小説であること

に間違いはない。

* * *

（中略）

小人目付は微禄の上に、賄いや

付け届けを受け取れぬ仕事だから

暮し向きはかなりきつい。

「金貸しの仕事かて、遊んでる暇

はあらへんで。ここがすんだら、

昼過ぎには別口の取立てに、滝野

川村まで足を延ばさなならんや」

滝野川といえ、中山道を北へ

向かった巢鴨村の先で、板橋宿に

かかるあたりだ。かなりの道のり

がある。

「それなら、そつちを先にすりゃ

あいい。どつから取つても、金に

違いはあるめえ」（以下略）

* * *

通称、鞠婆（まりばば）といわ

れる高利貸しの婆さんと、取り立

て役の藤八との会話だが、滝野川

村とか巢鴨村という中山道を舞台

に、現在も残る地名が出てくるあ

たりは面白い。

登場する人物は、全作品に共通

する。主人公の鹿角彦輔は、身な

りは素浪人だが、歴とした御家人

の三男坊。その他の人物は、下層

社会の貧しい人間ばかりである。

仇討ちに立ち会つたり、借金の

取り立てに護衛したり、いわゆる

道連れ稼業に生計をゆだねる彦輔

は、剣豪ではなく、少しばかり腕

が立つ素浪人風のキャラクターが

面白い。

骨休めに、ゴロリと横になって

読み流してよい。（平山記）

宮本巡査部長の殉職

* * *

二月六日の夕刻、東武東上

線・常盤台駅構内に進入した

自殺志願の女性を救助しよう

と、駅前交番勤務の宮本邦彦

巡査部長が、身を挺して電車

を停めようとした。くだんの

女性は助かったものの、自ら

は、車輪に巻き込まれて重傷

を負ってしまった。

区内の病院に搬送されての

懸命の治療がつづけられてい

たが、その努力も甲斐なく、

一二日に亡くなった。

二階級特進して警部になつ

たが、その死を惜しむ声は巷

に満ち溢れ、安倍首相も弔問

に訪れた。

町内で起きた事故だけに、

同巡査部長をよく知る学員の

須田幸男町会長も、テレビの

インタビューで、早期回復と

現場復帰を祈るコメントをし

ていたが、帰らぬ人となって

しまった。子供たちからも慕

われ、見舞いの千羽鶴が数多

く届けられたニュースにも、

心うたれた。

（日記）

■昭和三五年から「東新町」

今回の「東新町」の旧地名は、前回取り上げた「上板橋」と同じ上板橋村である。昭和五年の東京府北豊島郡上板橋村全図をみると、この地域は「上ノ根」となっている。

地名の由来…①9

「東新町」の巻

る。小茂根のもとになった「根上」とは別にある。

今回の取材で、東新町二丁目町会副会長の三井久夫さんにお話を伺った。町会の記念誌を片手に話してくださったいきさつは、次のようなものであった。

昭和三五年、人口の増加にともなわぬ、町名地番の変更をすることになった。そこで協会の役員が集まり、協議を重ねた末に「東新町」と名づけたという。それは当時の付近が呼ばれていた、上板橋村の「上ノ根新田」または「東」という文字を、少しでも残しておこ



▲安養院の鐘楼

うという理由からだった。「上ノ根」の上はこの地域が台地上にあるため、台の上という意味があると考えられる人や、氷川神社の神の根と考える人もいる。ここで協会と

という。当時、中心となって活躍されたのは、篠統一郎、小野沢知興、小野沢政吉、平井宥観といった方々だそうである。

■安養院の梵鐘が有名

東新町は主に住宅地であり、二丁目の大きな部分を、桜川小学校、城北中学校、城北高校が占めている。この地域でよく知られているのは、氷川神社、安養院であり、安養院の道路のはす向かいには、かつての上板橋村役場の跡地で、今でも御影石の門柱が残っている。

安養院は正しくは真言宗豊山派、武王山最明寺という。鎌倉中期に北条時頼が諸国行脚の折、この地に建立したことに始まると言われている。安養寺の梵鐘は元禄二年（一六八九）の鑄造であるが、ひびが入ったため享和二年（一八〇二）に再鑄されたものである。鐘の特徴は、鐘面を五区に区画して百字真言を梵字で彫り、五個の撞座に真言五仏を表わす梵字が浮き出されているところである。この梵鐘は国の重要美術品に指定されている。

(中三川孝幸記)

編集後記

●今号からこの欄を担当することになった新米編集長です。不慣れた作業の連続で、前任の平山さんのご苦労の程を、あらためて感じています。在職した講談社での編集者生活は長かったのですが、この会報作成には手を焼かされました。

●この一年半パソコン同好会で講習を受けていたのが、真剣さが足りなかったようです。打ち込みも不慣れですし、とくに原稿の貼り付けには苦労しました。

●便利さと経済性がすべてに優先するという風潮には、抵抗して生きる最後の年代と思っていました。パソコンには死んでも触れるものかと心に誓っていた時期もあったのですが、その決意もパソコンの持つ底知れぬ魔力に触れて、虚しく潰え去りそうです。(金子記)